

『使徒たちは帰って来て、自分たちの行ったことをみなイエスに告げた。イエスは彼らを連れ、自分たちだけでベトサイダという町に退かれた。11 群衆はそのことを知ってイエスの後を追った。イエスはこの人々を迎え、神の国について語り、治療の必要な人々をいやしておられた。12 日が傾きかけたので、十二人はそばに来てイエスに言った。「群衆を解散させてください。そうすれば、周りの村や里へ行って宿をとり、食べ物を見つけるでしょう。わたしたちはこんな人里離れた所にいるのです。」13 しかし、イエスは言われた。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」彼らは言った。「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません、このすべての人々のために、わたしたちが食べ物を買に行かないかぎり。」14 というのは、男が五千人ほどいたからである。イエスは弟子たちに、「人々を五十人ぐらいずつ組にして座らせなさい」と言われた。15 弟子たちは、そのようにして皆を座らせた。16 すると、イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた。17 すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。』

【説教】

今日の聖書の言葉は、イエスさまが人々を招かれて開かれた食事について記されています。イエスさまはこの時、神の国について言葉を語り、そして病を患う人々を癒しておられました。つまり、このイエスさまが招かれる食事というのは、神の国の食事であり、そして病を癒す食事であると言えるのだと思います。それは、天国で受けるはずの神さまの前でする食事を、今この地上において受けてしまおうというそのような食事であったわけです。

この神さまが働かれる神の国の食事は、あらゆる病を持っている人々に癒しをもたらす力を持っています。その人を癒す力ではありますが、それがどんなものなのか、この神の国の食卓の特徴を表すものとして 16 節を見ていただきたいと思います。ここでイエスさまは、1 つのパンと 2 匹の魚を取り、天を仰いでそれらのために賛美の祈りを唱えた後に、それらを裂いて弟子たちに渡して人々に配らせたとあります。このことは、後々イエスさまが最後を迎えられた時、その前の晩に弟子達と交わした最後の晩餐で行ったものと同じであります。その時は、魚がぶどう酒に変わったという違いはありますが、パンの方はそのまま全く同じです。このことから言えることは、神の国の食事というのは、最後の晩餐、主の晩餐と

非常に密接に結びついているということです。

この二つの食事の関係ですが、こういうことが言えると思います。主の晩餐の方は、弟子たちだけと交わされた食事でありますので、その主の晩餐を通してまず弟子たちに、食事の取り方を指示なされたのだということです。そして、その弟子たちが、今度は給仕する役目となって全体的な神の国の食事の方向を決めて行くということを、イエスさまは意図されていたのだということです。ちょうどこのことは、晩餐会を開いて食事を提供して行くという時に、その準備の段階で、それをまかなう人々が一つのテーブルに集まって、打ち合わせをすることに譬えられると思います。主催者がどのように人々を招きたいのか、どういう意図を持ってもてなしたいのか、そのことをちゃんと給仕する者たちは理解しておくことが大切です。それぞれがばらばらになって、私はこれが良い、いや、自分はこうしたいとやっしまえば、せつかくの神の国の晩餐会は台無しになってしまいます。

それではどういうご指示を、イエスさまは弟子たちに出されたのかということですが、これは、今私たちが行っています聖餐式によくその特徴が引き継がれています。この後、聖餐式を行いますが、よく見ていて欲しいと思います。聖餐式というのは、男性も女性もどちらも横一線に並んで受けるものです。男性は女性の後にとらないといけないとか、逆に女性は男性より前に座ってはいけないなんてことはありません。このことは、当たり前になっていますので、普段あまりにもとめないことですが、イエスさまの時代からしたらとんでもないことでありました。「女性と食事するぐらいなら、死んだ方がましだ」というような言葉が平気で飛び交っていた時代でしたから、いかにイエスさまが大胆な食事のあり方を打ち出したかわかると思います。

ですから、給仕役をする弟子たちも、まずこの大胆な新しい食事の約束事を、自分自身もよくその身に受け入れておかないと、とても神の国の食事を準備することはできないわけです。他にも、ユダヤ人もなくギリシア人もない、自由人もなく奴隷もない、みんなキリストを通して一つであり同じなんだということ。このことを、晩餐会の主人が一番大切にされているということを、よく理解しないとイケません。仕事に就くとき、どこでも就業規則というものがあります。この神の国の晩餐会で給仕する役目に就く人は、ちゃんとできる限りそのキリストの新しい食事のあり方を、守りますと契約を結ぶのです。この約束が、神の国の晩餐においてちゃんと守られれば守られるほど、そこには神さまが生き生きと働かれる場を造り出すことが出来ます。まじめに、こつこつと、基本的なことを頑張っていれば、そんな特別なことをしなくても、ちゃんと神の国の食事を頂いた人々は癒されて行くのです。

そのためには給仕係のまかないの食事の時に、結構真剣に反省会もしないとだめですね。「お互い、ふさわしくないままで主のパンと杯を飲まないように、なるべく頑張りましょうね」とそのように打ち合わせが出来ているところは、とても良い状態だと言えると思います。もし、このように主の食卓がふさわしいものとして行うことができているほど、たとえ手持ちのものが少なくても、ちゃんと必要は満たされて行くということを、この聖書箇所は言っているのだと思います。神さまは全ての人々が満足して、しかもあまりが少し出るくらいにご自分がよく働くのだと、そう約束して下さっているのだということです。

イエスさまは、ここでパンを取り、賛美の祈りを唱えた後に裂いたパンを弟子たちに渡して、それを配らせました。これは、イエスさまはこの神の国の食卓の主催者であると同時に、この食事の給仕するものでもあったということを示すものです。当時における食事というのは、給仕するのは僕（奴隷）の役割でありました。また、僕がいなければ、女性がもっぱらやらされていたことです。ですから、なんで私たち女ばかりが、配膳や後片付けをしなくてはいけないのか、どうして男はしなくていいのかと、不満がどんどん心の中にたまって行ったのです。それが昔からの社会の掟だからしかたないと思うと、結局何も変えることは出来ないのだと、無気力になりあきらめることにどんどん慣れて行ってしまいます。そのかわりに、その恨みや不満がいろんな形に化けて、結局男をも苦しめることにもなってしまうのだと思います。主催者自らが席を立て給仕を行うというイエスさまの新しい食事は、その古い食事のあり方を壊してしまうという、そのような神さまの意図がこめられていたのです。

給仕する役目、人々に仕えることは、とても大変なことです。古い食事の作法や伝統を守ろうとする人から、ものすごい抵抗や迫害を受けることになり、第一、とても大変ですね。出来ればやりたくないことであり、給仕される方がよっぽど楽です、その方が優越感に浸ることが出来ます。イエスさまは、先に来た者は後になりなさい。後から来る者が、先になるようにしなさいとおっしゃいました。どうして、このようにイエスさまは、ご自分に従う者たちにご自分のお役目の一端を、共に担わせようと願われるのでしょうか。

イエスさまは、十字架に付けられた時、このような言葉を人々から浴びせられました。「他人は癒したり、救えたけども、自分を救うことは出来ない、それでもおまえは選ばれたものなのか」と、馬鹿にされ、笑われたのです。給仕する者たちもやはり同じような状況に陥ることがあるでしょう。しかし、こういうことが言えると思います。真に人々に対して平和を造り出す者は、自分自身がその神さまの働きの通り道となるので、その人自身は表面的な平和を失うということが起こります。神さまが最もよく働いているその場所となっている人とい

うのは、ピタリと神さまが自分と重なっているのです、逆に気がつかないのです。イエス・キリストと重なり、その行くところに自分も共に行かされる人というのは、健康も含めていろいろなものがそぎ落とされて行くこともあります。しかし、そこには、イエスさまも経験された父なる神とご自分がまったく一つになってしまったという、深いところでの平安と自由がそこに待っているのです。

また、自分はそれで納得できたから良いとしても、家族を巻き込んでしまい、自分が熱心になればなるほど家族の人々を悲しませてはいないかと迷うこともあると思います。これも、イエスさまも経験されたことであります。母マリアを初めとして、ナザレ村からイエスさまがなされることをやめさせようと家族がやってきたことがありました。その家族の人々とイエスさまはその時は、わかり合うことなく、別々の道を行くことになりました。しかし、最後には、わかりあえ、家族の中ででも一つなることが出来たのです。

「ピエタ」という絵画がありますが、ごぞんじでしょうか。母マリアが、十字架から降ろされた息子イエスの亡骸を抱く2人の姿を描いたものです。マリアはこのとき、息子のイエスが一体何のために、命をかけて生きてきたのかわかったと思います。すべてを捨ててまで息子がその身を捧げたものの正体が、見えてきたのです。自分の家族が幸せならそれで良いとするのではなく、すべての家に、神さまのまことの平和をもたらすために、息子、命をかけたのだ。そのことを理解したマリアは、息子を心から誇りに思い、その流した涙は単に悲しみからのものではなかったのだと私には思われます。ピエタの母と子の姿は、息子を通してマリアが神さまと一つになり、主の平和の中に包み込まれた姿を現したものだと言えるでしょう。

すべての人を永遠の世界につなげるために、そして、すべての人を一つにつなぎ合わせるために、イエスさまは、弟子たちに「あなた方が彼ら彼女らに食べ物与えなさい」という役割を下されました。給仕するものは、確かに誰よりも人間の栄光を失うことになるでしょう。しかし誰よりも神の栄光を現す神の食卓の奉仕者となれるのです。この神さまのお恵みを、今日の聖書の箇所から、共に聞くことができると願います。